

郷土博 通信

No.19

2022 春



『浮世風呂』(解説10頁)



CONTENTS

- | | | | |
|-------------------------|-----|----------------------|-----|
| ■『浮世風呂』 | 1 | ■シーボルトが見た与島の“たで場”(下) | 7~9 |
| ■展示室の紹介 | 2~3 | ■『浮世風呂』について | 10 |
| ■「中世の讃岐 -武士の誕生と讃岐の人びと-」 | 4~6 | ■INFORMATION | 10 |

第1展示室

(展示期間：4月～9月)

讃岐の薬用植物

薬用植物とは、薬として用いる植物のことで、薬草ともいいます。そのままの状態で行う、粉末にするなど簡単な加工をする、煎じるなどして、世界各地で古くから使用されてきました。

薬用を目的とした学問を本草学といい、薬草以外にも広く動物、鉱物の形態、産地、効能などを研究するものです。古代中国におこり、1～2世紀頃に著されたと考えられている『神農本草経』が最古の本草書とされ、日本には遣唐使によって伝わったといわれています。江戸時代初期に明代の医師 李時珍が著した『本草綱目』が紹介されると、日本での本格的な研究が始まり、貝原益軒の『大和本草』、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』などが著されました。そして江戸時代後期以降には西洋科学の影響を受け、近代的な博物学へと展開していきます。

当館には、鎌田共済会図書館（※）が香川県坂出高等女学校の教諭である浦上仁一氏に採集を依頼した薬用植物標本があります。その標本は1933（昭和8）年8月発行『鎌田共済会雑誌』10巻3号において「我図書館は薬草研究の資料として茲に標本と目録を備へた次第である」とし、157種の薬用植物を紹介した「郷土薬用植物標本目録」を掲載しました。

その後も採集・研究を続けていた浦上氏は、さらに鎌田共済会の援助を受けて1936（昭和11）年に小冊子『讃岐薬用植物 実験的療法』を出版しました。その中では症状別に有効な薬用植物の名称とその処方を掲載するとともに、植物の数を339種に増やした目録「讃岐薬用植物」を紹介しています。

小冊子出版までに採集された標本には、植物の科名、名称、採集時期、採集地などを記載したラベルがあり、余白部分には効能や服用方法などがメモ書きされています。

今回の展示では、本草学の書物とともに、当館所蔵の薬用植物標本をご紹介します。

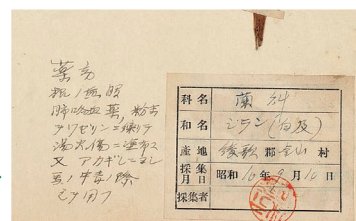
（宮武 尚美）



▲エビネ



▲シラン



▲ラベル拡大

（※）鎌田共済会は1922（大正11）年に図書館を、1925（大正14）年に郷土博物館を開館しました。博物館建物は1992（平成4）年のJR坂出駅高架工事により取り壊されたため、現在の建物（旧図書館）に移転、図書館資料は、現在、郷土博物館の資料として管理しています。

第3展示室

(展示期間：4月～9月)

『北斎漫画』を楽しもう

『北斎漫画』は、1814（文化11）年正月、江戸の浮世絵師・葛飾北斎^{かつしか}が55歳の時に刊行されました。もともと、全国各地にいる彼の弟子（門人）たちのための絵手本（テキスト）として、「漫ろに画いた」300あまりの絵を1編だけのつもりでまとめたものでしたが、一般の人々にも好評だったので、出版元は1819（文政2）年までの間に9編の続編を作って一応完結しました。しかし、その後も続編が刊行され、1849（嘉永2）年に北斎が90歳で亡くなったあと、1878（明治11）年に最後の15編が刊行されました。シリーズ完結までに60年あまりを要したわけですが、今もなお、木版印刷や写真印刷され続けている超ロングセラーといえます。

『北斎漫画』は現代のマンガとは異なり、ストーリーはなく、人物（男・女・子供・僧侶・公家・武士・農民・諸職人・町人・商人）、動物、植物、昆虫、魚介類、風景画の中に描きこまれる山・川・海・船・家屋敷・橋梁、龍や猿^{ぼく}などの架空の動物や幽霊・化物物、

江戸の日常生活のおもしろおかしい情景とそこに描かれている生活道具類、祭礼のようす、波や水が流れるさま、遠近法（三ツ割の法）の説明画など、身の回りにあるさまざまな物を北斎独自の観察眼で描いた画集といえるでしょう。

12編の序文には、当時の北斎（75歳）を「狂態百出、筆力老いてますます壮なり」と記していて、11編までとは違う表現が見られます。①「縦横」はおもしろい絵手本的なスケッチで、12編以前から見られたものですが、②「屎別所」は、^{しべっしょ}廁で用を足す主人と^{かわや}廁の外で鼻をつまんで座って待っている3人の

従者の絵で、日常風景の中の笑いを描いています。また、③「鰻登り」は、ヌルヌルの大鰻3匹に男がまたがって空中を登ろうとしていて、どこことなくエロチックなユーモアを感じます。さらに、④「ろくろ首と三ツ目の眼鏡」は、若い女性のろくろ首が寝たばこを嗜み、年配の女性のろくろ首は三本目の手に^{きせる}煙管を持って三味線弾きを覗き込み、三つ目の大男は眼鏡屋に眼鏡を調整してもらっているという、何とも不思議な絵です。

この機会に『北斎漫画』全15編をじっくり眺めて楽しんでいただきたいと思います。

(齊藤 祐司)



▲①「縦横」(十二編)



▲②「屎別所」(十二編)



▲③「鰻登り」(十二編)



▲④「ろくろ首と三ツ目の眼鏡」(十二編)



中世の讃岐 —武士の誕生と讃岐の人びと—

第11回公開講座から
上野 進（徳島文理大学教授）

武士といえば日本の歴史において重要な位置を占める存在といってよい。なぜ武士は生まれたのか。四国では藤原純友が反乱を起こす一方、讃岐国府のある阿野郡を本拠とする綾氏は、讃岐第一の武士団となって源平合戦に参加した。本講座では讃岐武士の誕生・成長を中心に探りたい。

1. 藤原純友の乱と讃岐国

従来、藤原純友の乱は平将門の乱とともに時の年号にちなんで承平・天慶の乱とよばれてきたが、研究の進展によって承平年間（931－938）には純友も将門も反乱をおこしていないことが明らかとなり、近年は乱の総称として天慶の乱という言葉が使われるようになった。実際、『本朝世紀』天慶2年（939）12月21日条をみると、前伊予掾（次官の下に位する国司）であった純友が承平6年（936）に海賊追捕の命令を受けたとあり、承平年間の純友は海賊を討伐する側にいたことがわかる。承平6年6月には海賊2500余人が投降したが、この海賊鎮圧に尽力したのが純友と考えてよい。ただし派遣されたのは純友だけでなく、下級武官・掾クラスの人びとが諸国警固使となり、現地で勲功をあげていた。海賊平定後、純友ら勲功者たちは瀬戸内海の諸国に土着したが、その顔ぶれは備前の藤原文元、播磨の三善文公、讃岐の前山城掾藤原三辰らであり、純友は彼らや海賊を配下におさめ、その盟主となっていたのだろう。ここに西国における武士の誕生をみるができるが、彼らは現地で国司と対立し、このことが乱勃発の火種となってゆく。

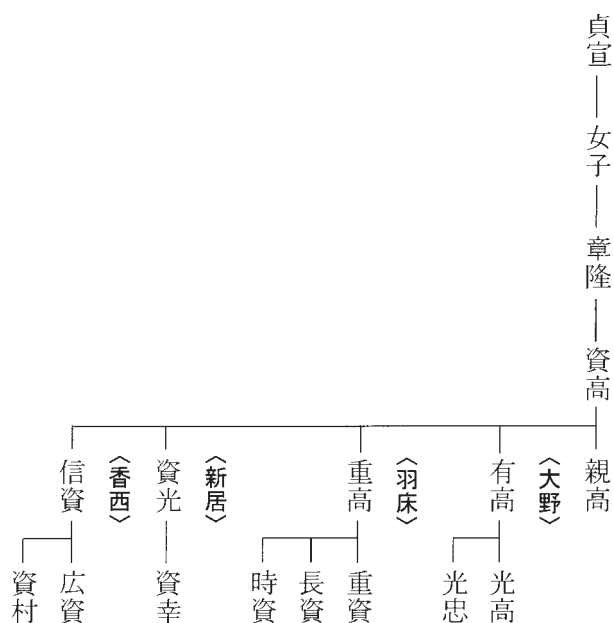
天慶2年になると再び海賊の活動が活発化する。純友は部下と国司との対立に介入しようとしてはいたが、当初は政府に対して反乱をおこす意図をもたず、また政府も将門の乱の対応に追われ、西国での抗争は拡大させない方針をとった。将門の乱が終結すると政府は海賊の鎮圧に本格的に乗り出すが、純友の部下のみを追討対象としたようである。だが同3年8月には讃岐・伊予国が賊に襲われ、兵船400余艘が伊予を襲撃した後、讃岐国府を襲って放火・焼亡させ、讃岐介（次官にあたる国司）藤原国風らは阿波国から淡路国へ追いやられている。純友による決起とみられ、ここに伊予の純友、備前の文元、讃岐の三辰が反乱勢力として結集するにいたる。純友軍の攻勢はしばらく続いたものの、翌4年2月には政府軍が讃岐国の純友軍を破る。5月になると純友軍が大宰府を占領したが、博多津の決戦で政府軍が勝利し、逃れた純友らは各地で討たれた。

2. 讃岐国の在庁官人から讃岐武士へ

平安時代中期以降、自分の所領や権益を守るために自衛する集団もいたことだろう。だが彼らの所領や権益を守るためには朝廷や国衙（国の役所）の認定が必要であり、そのため国衙の役人になり、軍事の専門家として職能を発揮し、権益の確保を有利にする者も登場してくる。つまり武人としての職能を通じて所領や権益の確保を実現した者が武士であり、彼らの多くは国衙の権力や機能に依存しながら成長していった。また平安時代中期の国衙では国司の権限が強化され、特に長官である守に地方政治が任されるようになり、機構改革が進められて行政機能ごとに租税を扱う税所、治安警察の職務をもつ検非違使所などの各種の「所」が置かれた。これらの所に勤務する役人は在庁官人（あるいは在庁）とよばれ、国衙は在庁官人を中心に運営されてゆく。

讃岐国の在庁官人の中で注目すべきは綾氏である。国府のおかれた阿野郡を本拠とする綾氏は在庁官人の中心的存在といえる。その先祖は押領使であったとされ（綾氏系図）、これは国内の兵

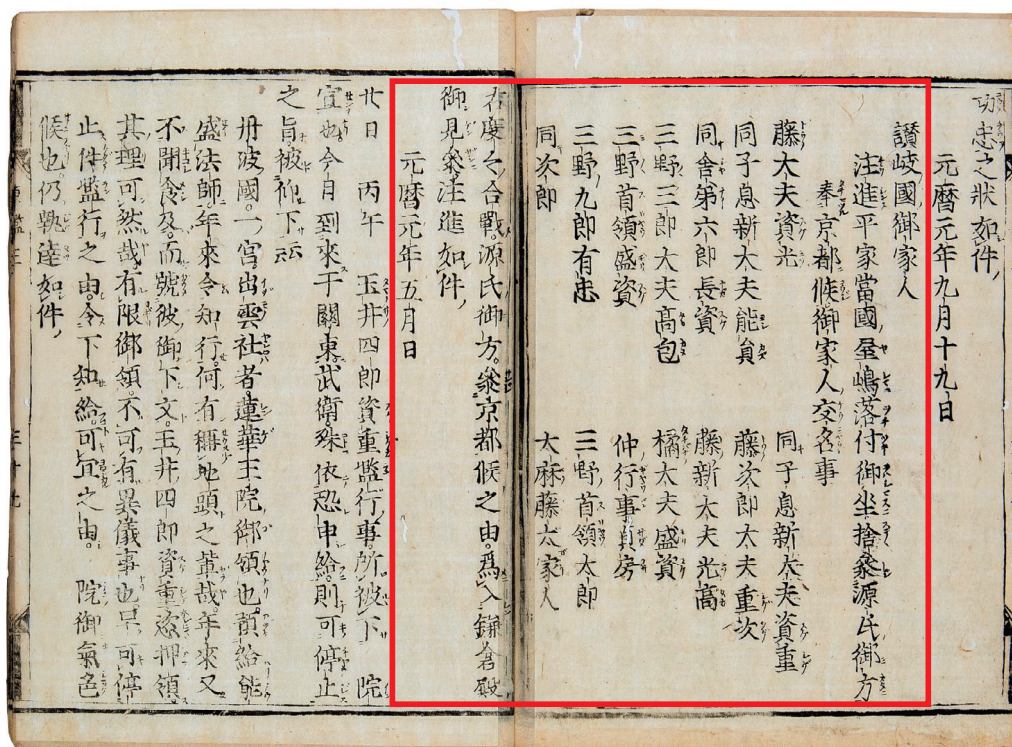
を動員して凶徒を鎮圧する職である。綾氏が押領使となったのは、おそらく藤原純友の乱の時であろう。また讃岐国検非違使所さだよりの役人貞頼・貞久さだひさ（『春日神社祐賢記』）は綾氏の一族とみなされている。このように綾氏が、特に軍事・警察を担当する押領使・検非違使の地位についていたことは重要で、武装蜂起を鎮圧する戦士としての地位をもとに綾氏は讃岐第一の武士団に発展していった。綾氏系図（図1）をみると、あきたか草隆の子・すけたか資高は羽床郷を本拠として羽床氏を称し、その子息らは香川郡大野郷を本拠とする大野氏、香野郡新居郷の新居氏、香西郡の香西氏などの諸家に分れていった。讃岐藤原氏と称した綾氏は中世には中・西讃に勢力を振るう武士団に成長する。



▲図1 綾氏系図(『続群書類従』所収「綾氏系図」より抜粋して作成)

ところで元暦元年（1184）の一の谷合戦直前に、「阿波・讃岐の在庁ども」が平氏にそむいて源氏につこうとし、備前国下津井に陣をしいていた平教経父子らを攻撃したという（延慶本『平家物語』巻九）。だが、裏切りを怒った教経から反撃を受けて彼らは淡路島へ逃れ、結局は教経軍に破られ「在庁已下百三十二人」の戦死者を出して京都へ逃げ上ったという。

一の谷合戦後、京都にいた頼朝の家人・橘 公業は、讃岐国の武士14名が参じてきたので、5月^{きょうみよう}にその交名(リスト)を作成し、鎌倉の頼朝へ届けた(『吾妻鏡』元暦元年9月19日条(図2))。



▲図2 『吾妻鏡』元暦元年9月19日条

頼朝は彼らを御家人にすることを認めている。この交名に名前を載せた讃岐武士たちとは、①藤大夫資光、その子息の新大夫資重・同新大夫能資、②藤次郎大夫重次、その舎弟六郎長資、③藤新大夫光高ら14名である。彼らこそ、京都へ敗走したという讃岐国の在庁官人たちとみられ、綾氏系図（図1）を参照すると、①に新居資光、②に羽床長資、③に大野光高の存在が確認できる。つまり中讃から西讃地域で活動した武士たちが、頼朝のもとに御家人として編成されたといえよう。

3. 讃岐の源大夫の物語

平安時代後期の説話集『今昔物語集』（巻十九第十四）に記された讃岐の源大夫の物語をひもとき、讃岐に生きる人びとの姿をみてみよう。讃岐国の多度津の辺りにいた源大夫という武者は殺生を業とし、山野の狩猟や河海の漁撈にあけくれ、人の首を切り、僧侶を忌み嫌う「悪人」であった。ある時、村堂で行われた仏経供養の講で、講師から「西にどこまでもいくと、阿弥陀仏がおられる世界がある。どのような罪業を積んだ人間も、過ちを悔いて『阿弥陀仏』と称えれば必ず極楽浄土に迎えて下さる」と聞き、仏の道につく決意をする。西方をさしてひたすらに歩みつづけ、西海を見はるかす高い峯にある頂の木の股で絶命したという。

このような源大夫の往生・靈験を事実とすることはできないが、すべてが絵空事でもない。実際、曼荼羅寺の再建を決意した善芳なる僧侶が治暦2年（1066）に讃岐の国府へ提出した申請書によれば、「善通寺・曼荼羅寺の南にある山に多度・三野両郡の「悪業人」らが乱入し、弘法大師の聖跡は鹿や鳥の狩猟の場となっており、彼らの殺生を禁断してほしい」と訴えている（東寺百合文書）。ここには源大夫のモデルといえる「悪業人」（＝悪人）を確認できるのであり、この源大夫の物語は事実をふまえていたといえる。また善芳が求めた殺生禁断とは、一種の所領の聖化（＝俗権力の排除）であり、当時の寺院経営上の意図も読み取ることができる。

【主要参考文献】

- ・『香川県史2 中世』（1989年）
- ・小峯和明『説話の声』（新曜社、2000年）
- ・下向井龍彦『日本の歴史7 武士の成長と院政』（講談社、2001年）
- ・寺内 浩『古代国家と伊予国』（『愛媛県の歴史』山川出版社、2003年）



▲坂出市民ふれあい会館にて(2021年10月16日)

かまはく百年手帖 (三)

※郷土博物館はまもなく開館100年を迎えます。この間多くの人が交差しいろいろな出来事が起きています。その中から貴重なもの興味深いものを取り上げ、『かまはく百年手帖』と題して紹介します。

シーボルトが見た与島の“たで場” (下)

1 与島のたで場～従来の推定地～

オランダ商館医師シーボルトは、1826（文政9）年江戸参府の帰路、備讃瀬戸の与島^{よしま}に立ち寄り、瓦葺の家々が立ち並ぶ小さな村や船の修繕所（たで場）の様子を記録に留めた。

与島には各地の船が寄港しており、たで場についてはシーボルトの記録以外にもいくつかの文書に登場し、その存在が確かめられている。

近年の研究や昨年刊行された『坂出市史』では、その所在地について島の東海岸に「たてば」という類似した地名があり、そこには造船所跡の波止が残っていることから、この付近がその遺跡であろうと推定されている。

しかしながら、疑問点がいくつもある。その波止は奥行き約40mで大型船の停泊には狭すぎる。丘陵と海岸との間は現在でも家一軒の幅で、シーボルトが記録した人家が集まる風景を想像するのは難しい。地名は「たてば」で「たでば」ではない点も注意を要するだろう。

古来、瀬戸内の港は「津」や「浦」と呼ばれ、河口や湾曲した入り江を利用したところが多いことを考え合わせると、現地比定は再考の余地が十分にある。まずは瀬戸内の類例を見ていくことにしよう。



▲図1 与島の造船所跡の波止

2 瀬戸内の湊とたで場

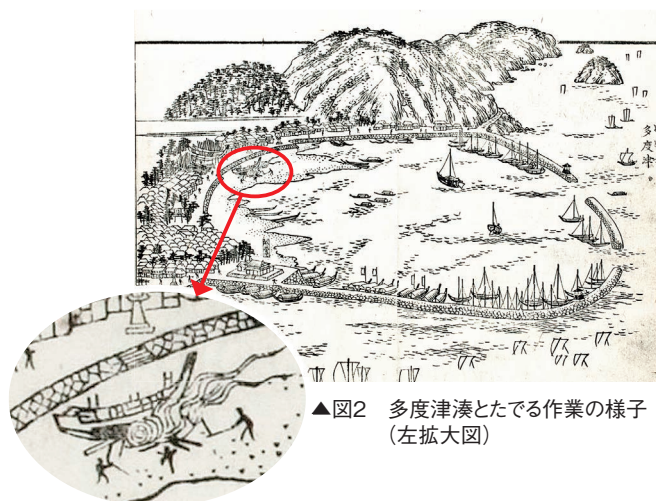
(1) 多度津

「金毘羅参詣名所図会」（1847年刊行）に多度津湊^{たどつ}の挿絵がある（図2）。現在の香川県仲多度郡多度津町大通り付近である。湊は入り江状で石積みの波止で囲まれ、大型船が十艘以上停泊している。

潮が引いた奥の砂浜では、船の底に丸太が差し込まれ、三人が火を焚く作業が描かれている。シーボルトが描写した「船底近くに置いてある藁火で有害な船虫を駆除しようとしていた」とはこのような光景なのであろう。

当時の船は杉・松・楠などの木でできており、船食虫によって穴があけられ、海藻・貝殻などが付着し、長期間放置すると舟航に支障をきたすことになる。

このため数か月ごとに柴や茅を燃やして虫を駆除したり付着物を除去することが必要で、この作業を当時「たでる」と言っており、「焚」「燻」という字が当てられていた。



▲図2 多度津湊とたでる作業の様子（左拡大図）

(2) 鞆の浦

瀬戸内海の中央部に位置する鞆の浦（広島県福山市）は、古代以来数々の史料に登場する瀬戸内を代表する湊である。図3の航空写真からわかるとおり、大きく湾入した地形にさらに石波止が設けられ波除の機能を強化している。

たで場跡は湊の西奥にあり、関連文書の調査や考古学的な調査が近年実施され、実態が明らかになってきている。それによると17世紀末～18世紀初め（元禄・宝永年間）にはすでにたで場があり、18世紀末（寛永2・3年頃）に港を囲む波止と浜の石垣が造られた。

その後、船舶の大型化に伴いたで場が狭くなったため、1827（文政10）年に新たに敷石をしたり、岩盤を削平したりして浜全体で大船10艘をたでることができるように整備した。

考古学的な調査によると、たで場全体の規模は南北100m以上、東西40m以上と推定されている。



▲図3 鞆の浦航空写真(文献④より転載)



▲図4 鞆の浦のたで場跡(文献⑤より転載)

3 伊能図に描かれた与島の湊

多度津湊・鞆の浦の2例と与島のたで場推定地とを比較すると、湊の地形は大きく異なり、規模の点でも与島の石積み波止へ江戸時代でも大型船が何艘も出入りすることは不可能であろう。

与島において、推定地以外で適地があるかと言えば、伊能忠敬の地図にその場所が見事に描かれているのである。

図5は1808（文化5）年に伊能らによる島しょ部の現地測量のもとに作成された「大日本沿海輿地全図」の該当箇所、与島の北辺中央部が馬蹄形状に大きく湾入した地形が描かれている。そして湊を示す「△」の朱色記号が添えられている（上下が逆になっている「與」の字の左側）。湾の規模は南北長約500m、東西幅約300mで、周辺を含めてここを「北湊」と仮に呼んでおこう。

この北湊において瓦葺の人家の存在は確かめられるのだろうか。

今から約40年前、瀬戸大橋架橋に伴って湾の南西部の丘陵裾部～平地部で発掘調査が実施された。現在「与島人名之碑」がある地点から南西50～200mのエリアである。

発掘の結果、次の諸点が明らかになっている。



▲図5 「大日本沿海輿地全図」の与島
(文献⑥より転載)

- (1) この地域は東南に面し日照が得られ、山裾には湧水地点があり、冬季の北西季節風は西の丘陵によって遮られ、生活に適した場所だった。
- (2) このことを裏付けるように、平地部からは縄文時代から現代までの遺物が出土し、南西部の小高い丘陵地には12世紀末～15世紀中葉（鎌倉・室町時代）の集落が営まれていた。
- (3) この集落跡からは漁網の重り（土錘^{どすい}）が出土しており、近くに漁船が出入りする場所があったことを示唆している。
- (4) 江戸時代では、人家の存在を示す柱穴や礎石は未確認であるが、寛永通宝など当時の品物が出土している。

以上のことから、この付近に江戸時代の集落が存在したことはほぼ間違いなからう。その集落の北側の湾の一面にシーボルトが書き記した「厚さ1.8mの花崗岩で石垣を築き砂浜の広い場所を海から切り離している」船舶の修繕所（たで場）があったわけである。

ところで、この北湊の現在の地名は「塩浜」である。シーボルトの上陸から15年後の1840（天保11）年から湾の一部が埋め立てられ塩田築造が始まっている。

前号で詳述した、呉^{くれしゅうぞう}秀三の依頼により鎌田共済会の岡田唯吉^{おかただきち}が調査を始めた1927（昭和2）年には、湾はすでに全て塩田へと変貌し、たで場は破壊・消滅し忘れ去られていたのであろう。このため、岡田は関連資料を入手できずに終わったものと思われる。

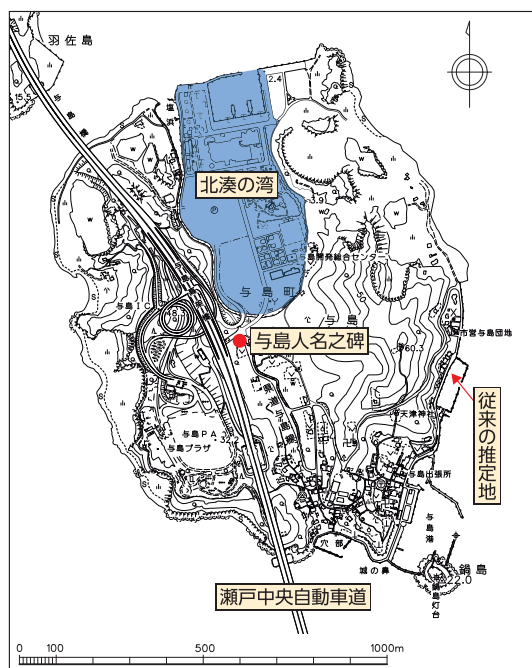
そして、現在ではその塩田も埋めたてられ北湊は瀬戸中央自動車道与島PA第2駐車場や民家などへと姿を大きく変えている。

かつて東西を結ぶ海路の寄港地だった与島は、200年後の現在、南北を結ぶ陸路の中継地として、再び賑わっている。

（館長 大山 眞充）



▲図6 与島人名之碑（南から）



▲図7 与島地形図（坂出市都市計画図より転載）

<参考文献>

- ①唐木裕志『『阪出壱田図』から「俣場」を読む』『天地人』第26号 坂出市教育会 2017
- ②山本秀夫『海運・漁業と坂出市域』『坂出市史 通史上 近世篇（下）』坂出市 2020
- ③福山市港湾河川課「軀港埋込に伴う埋蔵文化財確認調査報告（概要）」2013
- ④福山市軀の浦歴史民俗資料館活動推進協議会『軀の浦の自然と歴史』2011改訂版
- ⑤（公社）福山観光コンベンション協会『福山 軀の浦』2013
- ⑥アメリカ伊能大図展実行委員会『アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図』（財）日本地図センター 2004
- ⑦香川県教育委員会「塩浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅳ）』1981

『浮世風呂』について

冊子のサイズ：縦17.6cm×横12.1cm

(表紙解説)

『^{うきよ風呂}浮世風呂』は、江戸時代後期の小説家・^{しきていさん ば}式亭三馬が著した『^{こっけいぼん}滑稽本』といわれるジャンルの文学作品で、1809(文化6)年から1813(文化10)年までの間に4編9冊が刊行されています。

江戸市中の銭湯(男湯と女湯)を舞台に、そこに集まる庶民の日常の風景、たとえば、入浴直前に父親と子どもが脱衣しながら会話している様子や、寺小屋での勉強を終えた子どもたちが銭湯に寄り道し、歌舞伎の芝居ごっこを相談をしている様子、隣近所の女性同士が主人や姑の愚痴をこぼしているなど、日常のささいな情景をおもしろおかしく取り上げています。このように『浮世風呂』は、江戸時代の庶民生活をうかがうことのできる貴重な文化・風俗・歴史資料であり、また、その会話そのものが日本語の研究材料としても貴重なものといわれています。

通信の表紙中央の写真は男湯の情景です。手前から板の間、流し板、^{ざくろぐち}石榴口(浴槽への出入口)が描かれています。江戸に住む庶民の家には風呂がなく、毎日銭湯に通って隣近所の人たちと裸の付き合いをすることは至極あたりまえのことでした。

この冊子の表紙は、市松模様の地に「浮」「世」「風」「呂」の4文字を配置したデザインになっています。著者自身による「浮世風呂大意」や、各巻の序文には「式亭」と刻まれた印が捺されています。1冊に2・3図、内容に即した挿絵もあります。

出版された滑稽本の多くは貸本屋を通じて何度もくり返し貸し出され、庶民に愛読されて傷んだため、初版本で状態の良いものはほとんど残っていないそうです。

当館の所蔵本は、江戸時代(文化・文政期)の再版本で、各冊に2ヶ所程度、「高松 外磨屋町(現、高松市磨屋町・紺屋町)貸本所 細川常次」の蔵書印(右の写真)が確認できます。高松近辺で貸本として愛読されていたことがわかる貴重な図書資料です。(齊藤 祐司)

INFORMATION

■体験講座

「墨絵を楽しもう！」

墨の濃淡、筆の使い方、線の描き方を学んだあとは、花・動物・人の顔など自由に楽しく描いてみましょう。

2022年7月30日(土)

・午前の部10:00～12:00

・午後の部13:30～15:30

会場：鎌田共済会郷土博物館 2階講堂

講師：市原増夫先生（日本水墨画美術協会）

対象：小学生以上

参加費：¥300

持参物：雑巾・習字セット（お持ちの方）

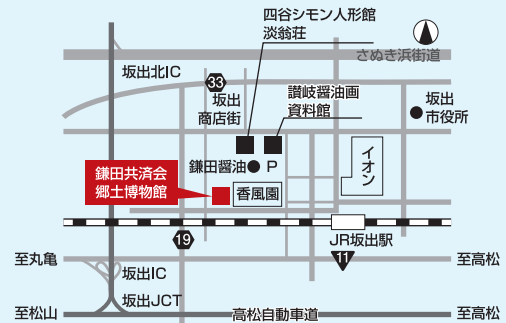
●電話でお申込み下さい。電話：0877-46-2275

【要予約、申込7月5日(火)から、先着各回10名】

※本講座は、新型コロナウイルスの感染拡大状況により中止になる場合があります。



鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

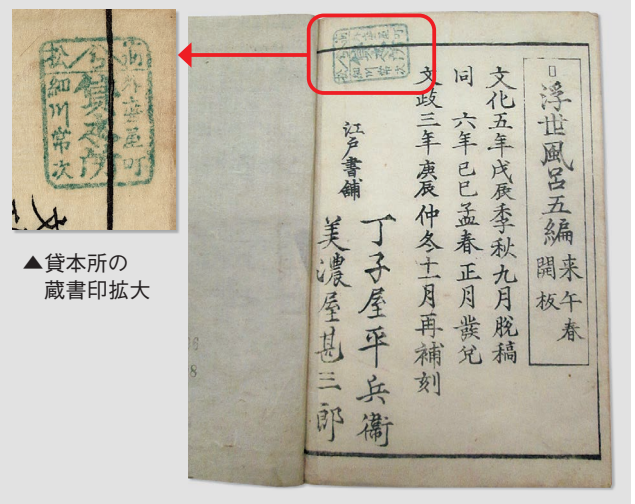
開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は4時まで）

休館日：月曜日／祝日

夏季特別（8月13日～15日）

年末年始（12月29日～1月4日）

入館料：無料



▲貸本所の蔵書印拡大